

論 文

UDC 620.192.45 : 621.746.047 : 669.14-462.2

電縫鋼管用連鉄スラブ中の大型介在物の低減*

鈴木健一郎**・江島 彰夫***・仲村 秀夫***

森 耐介****・三代 祐嗣****・飯田 義治****

Deoxidation Control in Continuously Cast Steel Slabs for ERW Pipe Use

Ken-ichiro SUZUKI, Akio EJIMA, Hideo NAKAMURA,
Taisuke MORI, Yuji MISHIRO, and Yoshiharu IIDA

Synopsis:

Deoxidation control to minimize the amount of large inclusions in continuously cast steel slabs for ERW pipe use has been investigated in commercial heats.

The results obtained are summarized as follows:

- 1) Care must be taken to deoxidize molten steel with Al at tapping, followed by stirring of molten steel by RH degasser within 20 min, and to control Al content in molten steel in tundish less than 0.005%.
- 2) The box type alumina graphite immersion nozzle is observed to be superior in refractory erosion with molten steel and in penetration depth of inclusion into crater to the inverse Y type fused silica nozzle.
- 3) Investigations on the formation of large inclusions which cause the defect of ERW pipe, reveal that entrapment of slag and/or flux into steel and enlargement in size by the reaction between FeO, MnO, SiO₂ in trapped particles and Al, increase progressively with Al content in molten steel.

物の生成機構について考察する。

1. 緒 言

彎曲型連鉄機により製造した連鉄スラブ中には酸化物系介在物が密集して存在する、いわゆる介在物集積帯があることは衆知の事実である。この点については多数の研究報告^{1)~5)}があり、連鉄機のモールド内に持ち込まれた溶鋼中の酸化物系介在物がモールド内を浮上する間にスラブ長辺面より発達するデンドライトの先端で捕捉される結果として集積が起り、したがつて集積状況はスラブの曲げ半径、モールドにおける溶鋼の流動状況および介在物の侵入深さに依存するとされ¹⁾²⁾、種々の集積低減方法が試みられている。

彎曲型連鉄機により製造したスラブを電縫钢管用素材として充当する場合には前述の集積介在物が、造管後のフッククラックおよび溶接部近傍の超音波探傷欠陥の原因として極めて重要である。本報告では、超音波探傷欠陥の低減を目的とする工程試験の結果を述べ、大型介在

2. 工程試験

2.1 試験条件

工程試験の概要はつきのとおりである。

転炉吹鍊は千葉製鉄所 80 t 転炉で行ない、0.08~0.10 %C, 1 700±10°C で吹止め、出鋼時に Fe-Mn, Si-Mn, Al を添加し、RH 脱ガス設備で溶鋼を 15~25 min 還流しつつ溶鋼の成分調整および酸化物系介在物の浮上分離を促進する。ついで、千葉製鉄所の半径 10m の円弧型連鉄機で断面形状 200×1 620 mm の鋸片を製造した。鋸込条件のなかでタンディッシュ内溶鋼温度、鋸込速度および水比はできるだけ一定とするように留意し、それぞれ 1 545°C (溶鋼過熱度 20~25°C), 0.8 m/min, 水比 1.2 l/kg·steel とした。

熱延鋼板の断面形状は 9.5×1 630 mm、電縫钢管の直径は 508 mm であり、造管後の超音波探傷は API 基準

* 昭和 49 年 11 月本会講演大会にて発表 昭和 49 年 12 月 28 日受付 (Received Dec. 28, 1974)

** 川崎製鉄(株)技術研究所 工博 (Research Laboratories, Kawasaki Steel Corp., 1 Kawasaki-chō Chiba 280)

*** 川崎製鉄(株)技術研究所 (Research Laboratories, Kawasaki Steel Corp.)

**** 川崎製鉄(株)千葉製鉄所 (Chiba Works, Kawasaki Steel Corp.)

Table 1. Casting conditions of slabs tested.

Test	Addition of Al in RH treatment	Composition of steel		Shape of immersed nozzle	Materials of immersed nozzle	Number of test heats
		Al	Si			
A	added	0.019	0.08	Inversed Y*	Fused silica	4
B	added	0.024	0.06	Inversed Y*	Alumina graphite	2
C	added	0.033	0.08	Box*	Alumina graphite	6
D	added	0.011	0.14	Box*	Alumina graphite	8
E	not added	≤ 0.005	0.16	Box*	Alumina graphite	12

* Jet angle; 25° downward.

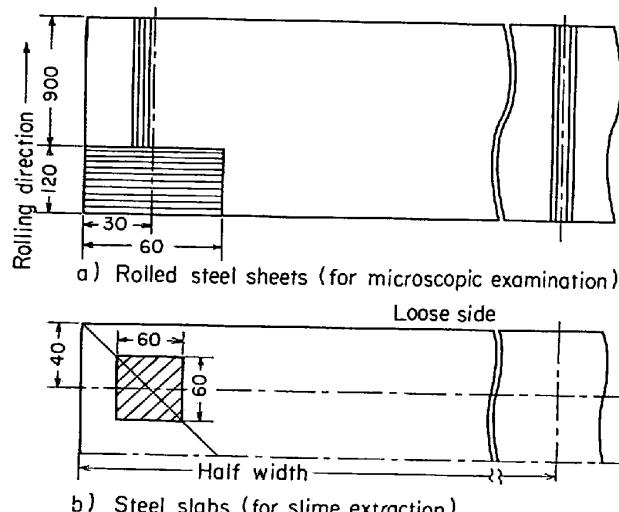


Fig. 1. Sampling positions for examinations of inclusions in steel.

にしたがい、水浸-多探触子法により、2.25 MHz、入射角度 45° の超音波を用いて行なつた。

タンディッシュ内溶鋼組成は 0.15~0.18% C, 0.7~0.9% Mn, P<0.02%, S<0.02% の 40, 50K 級鋼で Al_{sol} , Si 濃度はそれぞれ 0.003~0.035%, 0.06~0.16% の範囲の組み合わせに調整し、RH 处理中の Al 添加の有無および浸漬ノズルの形状、材質を変更した実験ヒートを出鋼した。これらの実験因子間の組み合わせを Table 1 に示す。A~E の試験ヒート数は 2~12 であり、ヒート間での製造条件の差はほぼ無視しうるので、以下 A~E の略称により記述することとする。

2.2 工程試験材の介在物調査方法

試験ヒートについては、スラブ、熱延鋼板および造管時に超音波探傷により欠陥と判定された個所より試験片を採取し、種々の調査に供した。

スラブおよび熱延板に対するサンプル採取位置を Fig. 1 に示す。超音波探傷欠陥については、ハンド探傷により欠陥の位置を正確に定めた後サンプルを採取した。

介在物調査は光学顕微鏡、EPMA (島津 EMX-SM

型) のほか SEM として日立 HHS-2R 型を用いて行ない、大型介在物の鋼中における存在形態を明確にすることに努めた。

3. 工程試験材の介在物調査結果

3.1 超音波探傷欠陥部の介在物

超音波探傷欠陥部には常に大型介在物が認められたがフッククラックを伴い、溶接部近傍の鋼管表面にまで達する介在物の発生頻度は極めて少なく、介在物はすべて溶接部より 10~50 mm 離れ、板厚の約 1/4 内側に相当する位置に存在していた。鋼管の製造工程を考慮するとこの位置はスラブ両端近傍の、スラブ上面側介在物集積帶に相当する。

超音波探傷欠陥部に見られた代表的な介在物を Photo. 1 に示す。これらの介在物はアルミナクラスターあるいは $Al_2O_3-SiO_2-MnO$ 系に CaO を含む相と Al_2O_3 濃度の高い相からなる複合介在物のいずれかである。欠陥部の介在物を 80 例調査した結果、熱延板の圧延方向と直角な板厚断面の介在物の大きさは幅 200 μ 、厚さ 10 μ 以上であることが判明した。したがつて、これが超音波探傷欠陥となる介在物の大きさの下限と考えられる。

なお、これらの大型介在物はヒート A~D について常に認められ、ヒート間で介在物性状の差異は少ないが、ヒート E については皆無であった。

3.2 热延鋼板中の介在物調査結果

熱延鋼板の圧延方向と直角な板厚断面および平行な断面において介在物の長さ (それぞれ b_T , b_L と略記する) を調べた。対象とした介在物は $b_T \geq 20 \mu$, $b_L \geq 50 \mu$ のもので、硫化物系介在物は光学顕微鏡下の色調の差により酸化物系介在物と区別した。熱延鋼板端部、中央部間の介在物性状には大差なく、一括して表記する。

調査結果を Fig. 2 に示す。Fig. 2 a), b) はそれぞれ b_T , b_L の平均値と最大値と試験ヒートの関係で、Fig. 2 a) より $b_L/b_T \approx 5$ が試験ヒートを問わず成立し、介在物の熱間圧延時の変形能、 ν は介在物の板厚方向厚

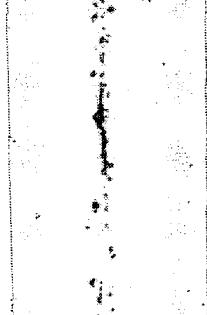
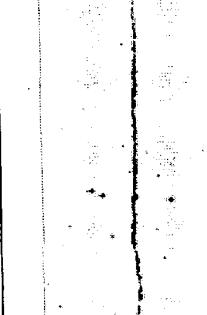
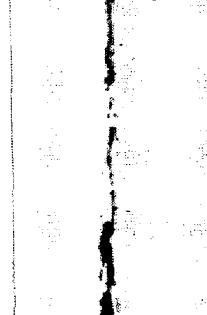
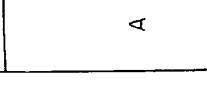
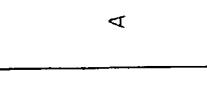
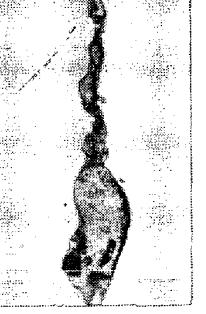
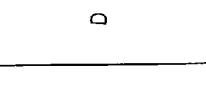
Test	Typical inclusions in UST defects			Analysed position	Compositions determined by EPMA (wt %)								
	0	400 μ	100 μ		FeO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	MnO	CaO	MgO	ZrO ₂	K ₂ O	Na ₂ O
D				Precipitate	—	100	—	—	—	—	—	—	—
A				Matrix	3	66	10	1	12	0.5	1	2	0.2
A				Precipitate	—	100	—	—	—	—	—	—	—
D				Matrix	1	40	26	10	15	3	0.6	0.3	0.2

Photo. 1. Microstructures and compositions of typical inclusions in UST defects.

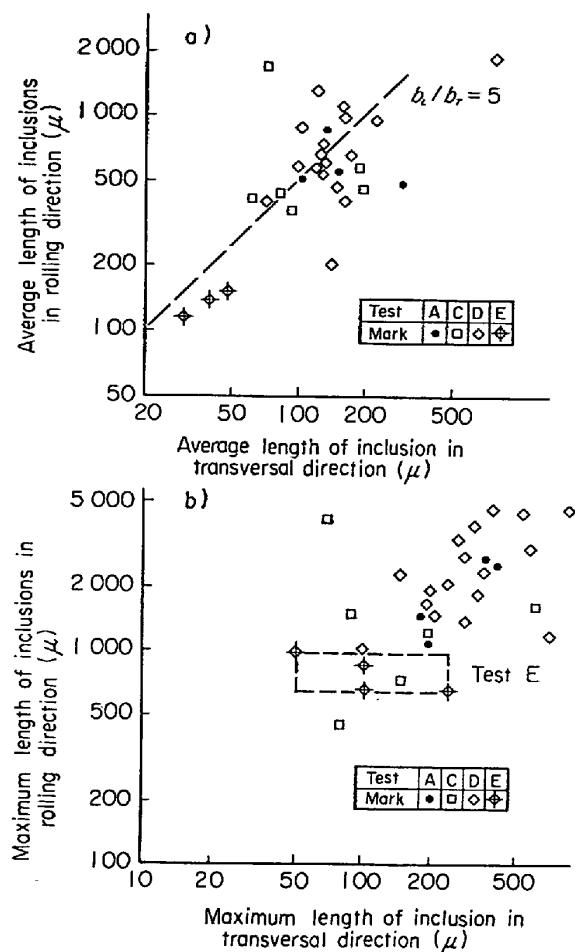


Fig. 2. Effects of casting conditions on length of inclusions in rolled steel sheet for ERW pipe use.

き、 d の測定結果を用い、(1) 式により 1.2~1.4 と評価される。

Fig. 2 b) は b_T , b_L の最大値を示し、試験 A～D に比較し試験 E では介在物が小型化し、 b_T の最大値は 250μ 以下であることがわかる。

介在物の熱延鋼板中の存在形態はヒート A～E を通して、つぎのような 3 種に分けられる。すなわち、タイプ I は圧延により十分に伸長した介在物、II は圧延による介在物の変形が不均一な介在物、III はタイプ II にアルミニウム粒子群を伴うものとアルミニナクラスターである。代表的な例を Photo. 2 に示す。

つぎに介在物個数、大きさ、超音波探傷検査での鋼管の合格率と各テストヒートの関係を Fig. 3 および 4 に示した。この結果より、つぎのことがわかる。

1) $\%Al_{sol} \geq 0.011$ のヒート A, C, D では介在物個数は少ないが, $b_L \geq 1000\mu$ (Fig. 2 より $b_T \geq 200\mu$ に対応する) のタイプ I あるいは II の介在物が大部分でその

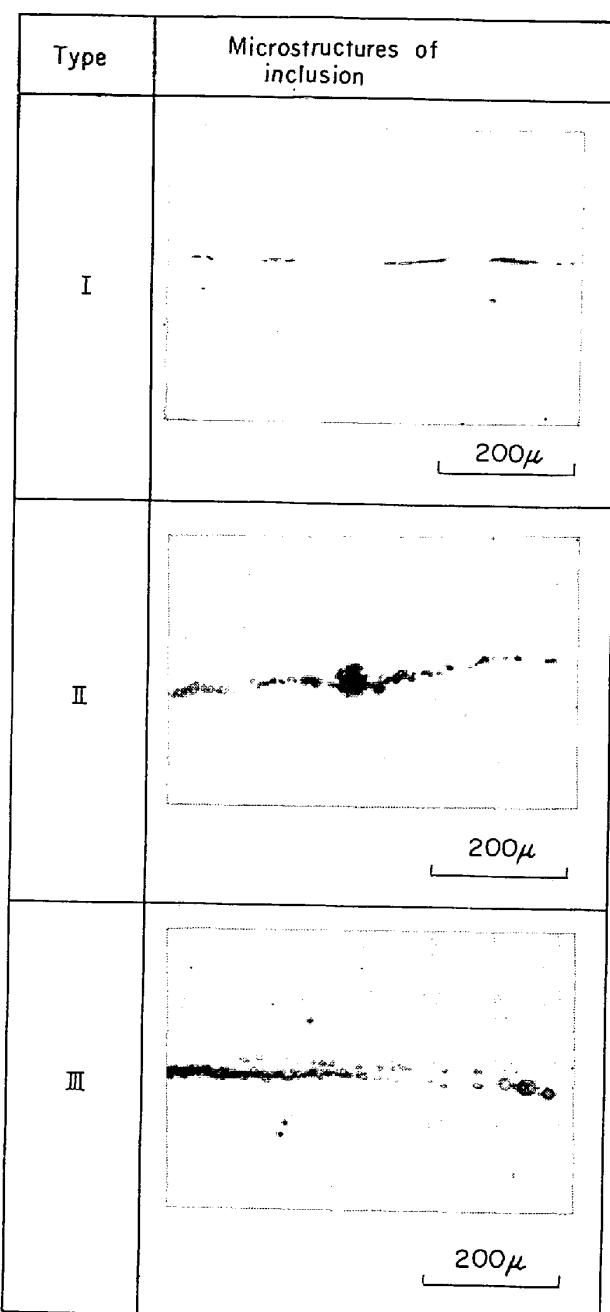


Photo. 2. Typical morphologies of inclusions in hot-rolled steel sheets.

数はヒートEに比較しかなり多い。

2) $\%Al_{sol} \leq 0.005$ のヒート E では、タイプ II あるいは III の介在物はほとんど見られず、介在物の大半は $b_L < 1000\mu$, $b_T < 200\mu$ の小型のものである。また、ヒート A, C, D に比べて介在物の大きさ、数に関しヒート E のバラツキはかなり少ない。

3) 超音波探傷欠陥の発生率は $b_L \geq 1000\mu$ のタイプ II, IIIに属する大型介在物の個数に依存すると考えられヒートEの製造条件が最適であると判断しうる。この事実は超音波探傷欠陥部に認められた介在物の大きさの下

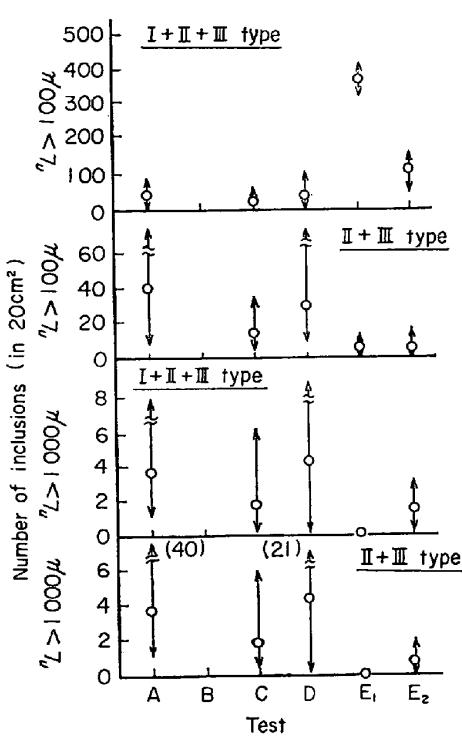


Fig. 3. The results of examinations for inclusions in steel sheet for ERW pipe use.

$n_{L>100\mu}$ denotes number of inclusions with b_L larger than 100μ . Acid soluble Al content of steel in tundish in a case of Test E_1 and E_2 is 0.002-3 and 0.004-5% respectively.

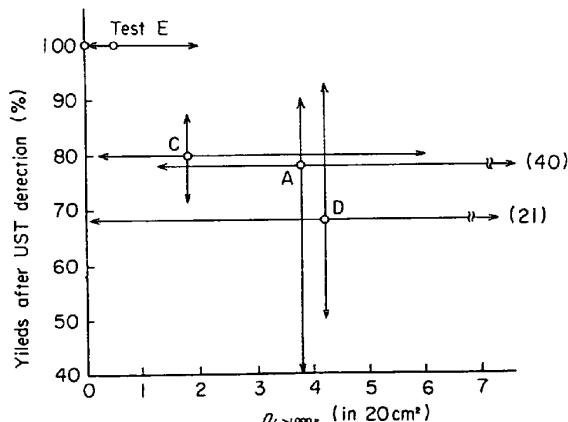


Fig. 4. Relation between number of large inclusions in hot rolled steel sheet and yields after UST detection.

限が $b_T \approx 200\mu$ であつたこととほぼ一致する。

3.3 热延鋼板中の介在物組成

熱延鋼板中の介在物のEPMA分析結果を $(\text{SiO}_2 + \text{MnO} + \text{FeO}) - (\text{CaO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}) - \text{Al}_2\text{O}_3$ 濃三元系に単純化して Fig. 5 に示す。ヒートA～Dへの超音波探傷欠陥部の介在物は $\% \text{SiO}_2 > \% \text{MnO} \gg \% \text{FeO}$ かつ

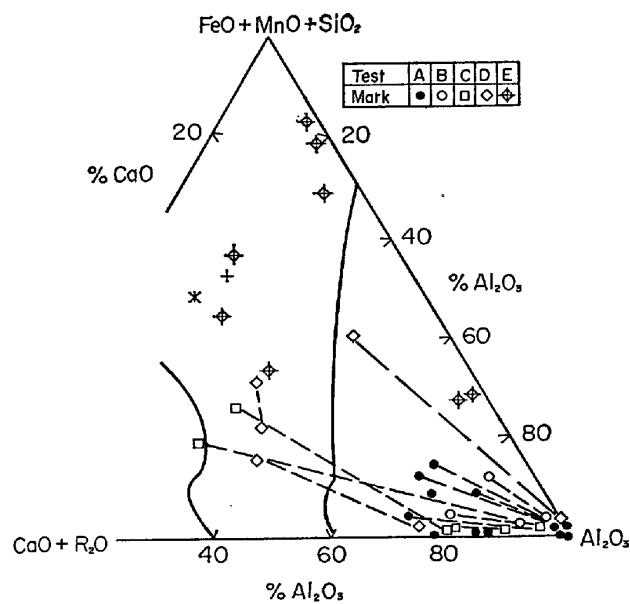


Fig. 5. Chemical compositions of typical inclusions in rolled steel sheets for ERW pipe use. Dotted lines denote compositions of coexisting phases. * chemical composition of ladle slag, + chemical composition of fluxes for continuous casting.

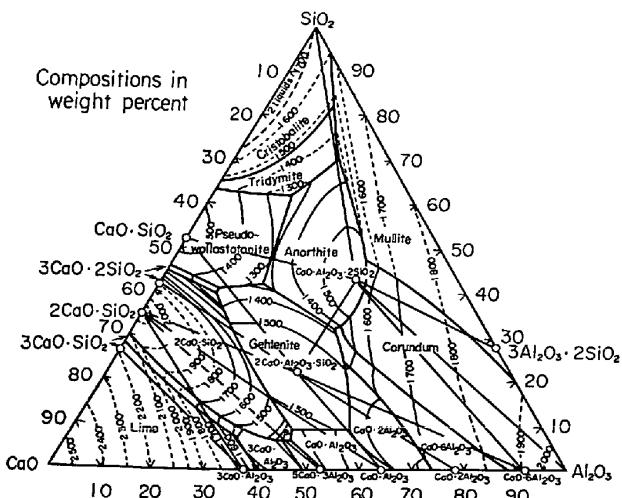


Fig. 6. Phase diagram for the system $\text{CaO}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{SiO}_2$ system.

$\% \text{Na}_2\text{O} + \% \text{K}_2\text{O} < 10$ であり、その構成相は Fig. 6 に示す $\text{SiO}_2-\text{CaO}-\text{Al}_2\text{O}_3$ 三元系状態図⁶⁾ 中で Corundum, $6\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot \text{CaO}$, Gehlenite 相のうちの二者であり、単一相介在物は認められなかつた。ヒート E では、 $\% \text{CaO} > 20$ の介在物は $\text{SiO}_2-\text{CaO}-\text{Al}_2\text{O}_3$ 系の Anorthite, Gehlenite のいずれかと $\text{MnO}-\text{SiO}_2-\text{CaO}$ 系の Wollastonite が共存し、融点は 1400°C 以下と推定される。また、 CaO をほとんど含まない介在物の過半は $\text{MnO}-\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 系

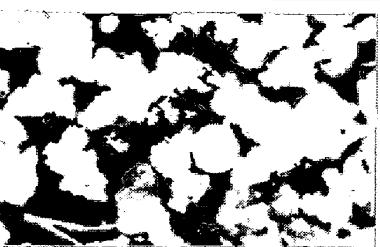
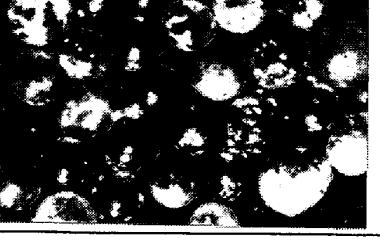
Test	Appearance of extracted inclusions x40	Yield after UST detection (%)
A		43
B		43
C		78
D		65
E		99.7

Photo. 3. Appearance of extracted inclusions.

の Spessartite などの低融点 ($<1200^{\circ}\text{C}$) 化合物の單一相で、例外的に Corundum 相を少量析出するものがあつた。したがつて、溶鋼温度における大型介在物はヒート A～C で固体、ヒート E では液体状態にあり、ヒート D では半溶融状態であると推定できる。

3.4 連鉄片内の介在物の性状

鉄片内の介在物はスライム抽出法を主体に調査した。しかし、スライム法ではスライムと介在物の分離に際し介在物本体に付随するアルミナ粒子が破断されやすい。

本研究では、スラブ中の介在物の光学顕微鏡観察、スライム抽出介在物の表層部の SEM による観察、定性分析により、スライム法の欠点を補うように努めた。

スライム抽出介在物の性状は Photo. 3 に示すように a) 表面の凹凸の少ない球形介在物、b) 表面にかなりの凹凸のみられる球形介在物および c) 不定期介在物の 3 種に分けられ、これらはそれぞれ先に分類したタイプ I, II, III に対応すると考えられる。

スライム抽出介在物および鉄片内の介在物の形態を SEM にて観察し、その典型的な例を、前記のタイプ別に Photo. 4 に示す。さらに、抽出介在物表層部の SEM による分析(非分散型 X 線検出器⁷⁾ 使用)の結果、Photo. 5c に明らかなように、タイプ I 介在物では Al, Si および Fe が検出され、タイプ II 介在物中の 6 角板状結晶表面では Al, Ca および K が (5a), 介在物表面より突出した角状結晶については Al, Ca および Fe が検出されている (5b)。タイプ III 介在物には、さらにアルミニナ粒子が伴われていることがあるが、アルミニナ粒子の介在物表層部への付着はタイプ III 介在物に常に認められ、かつその量はタイプ II に比べてタイプ III がかなり多い。

スライム抽出介在物表層部には 4, 6 角形の晶癖を有する結晶が多数認められ、その例を Photo. 6 に示す。 $\text{SiO}_2\text{-CaO-Al}_2\text{O}_3$ 系状態図中の Al_2O_3 コーナー附近には $6\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$, $2\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$ が存在し、その結晶構造はそれぞれ六方、単斜晶系に属する⁸⁾。また、これらの化合物を合成し、SEM にて観察したところ、 $6\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$, $2\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$ に対しそれぞれ発達した 6, 4 角形結晶を認め、結晶に対する電子線の入射角度が 90° となるように留意して分析した結果、介在物表層部の結晶、合成結晶の X 線強度は $\pm 6\%$ 以内で一致することが判明した。したがつて、スライム抽出介在物の表面の析出結晶は大半が $6\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$ で、ときには $2\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$ が出現することがあると考えられる。

これは、Fig. 5 の Al_2O_3 コーナーに近い介在物の組成の大半は Fig. 6 の状態図中で $6\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$ の安定域に入ることと一致し、中戸ら⁹⁾が浸漬ノズル内面に付着する 6 角板状結晶を X 線回折により $6\text{Al}_2\text{O}_3\cdot\text{CaO}$ と同定していることもこれを支持する。

3.5 連鉄片内の介在物の量

約 5 kg の鉄片についてのスライム抽出残査を 3.4 で述べたタイプ I～III の特徴を考慮し、実体顕微鏡で区別しつつそれぞれの個数を測定し、重量に換算してタイプ別に表示したものを含めて Fig. 7, 8 に示す。なお、Fig. 7, 8 はスライム抽出を各ヒートについて製造条件がほぼ等しい 2, 3 ヒートの鉄込中期相当の鉄片につい

Type	Microstructures in optical microscope	Microstructures of inclusions in slab	Micrographs of inclusion surface
I			
II			
III			

Photo. 4. Microstructures of typical inclusions in as-cast steel.

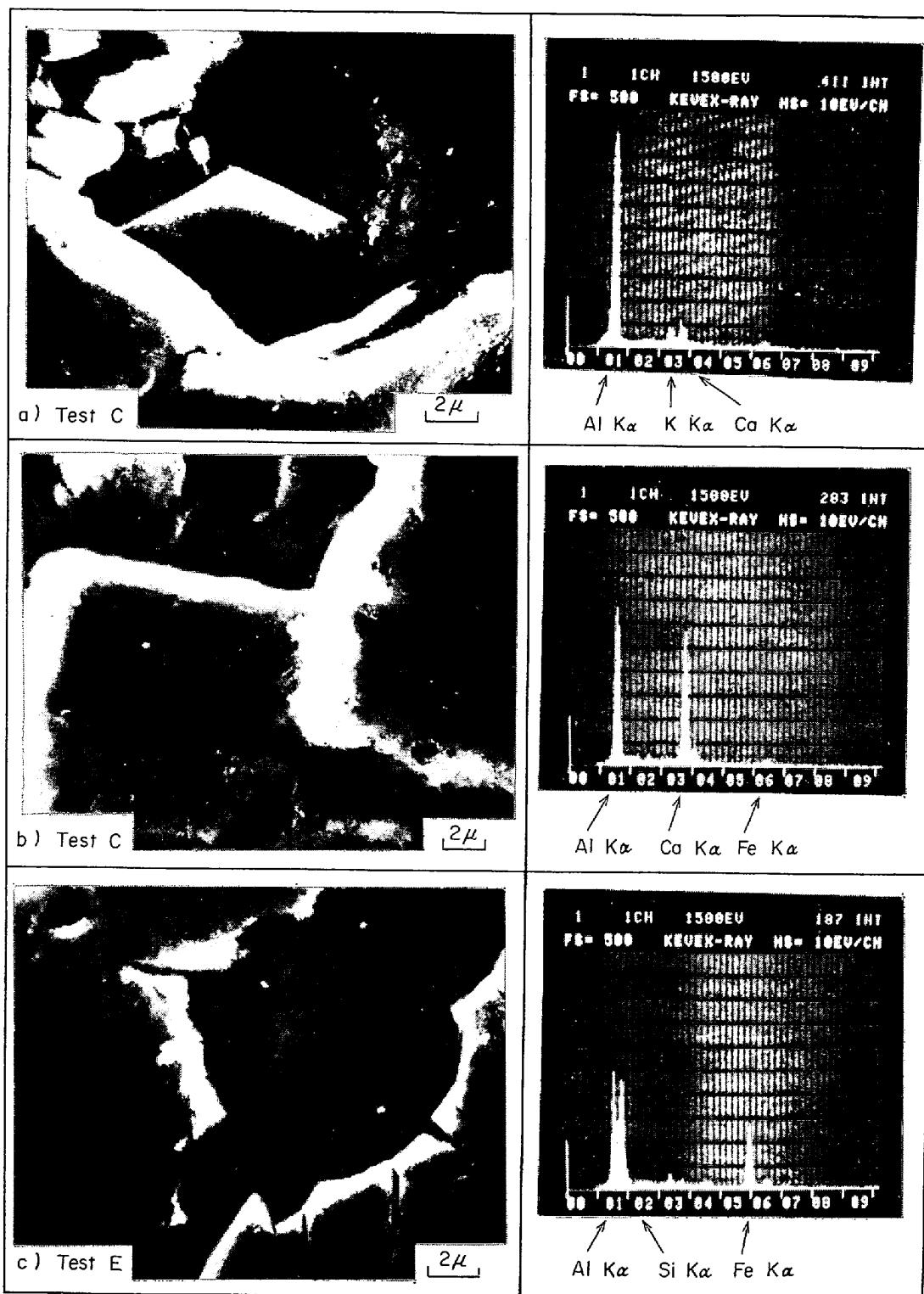


Photo. 5. Results of EPMA analysis for the surfaces of typical extracted inclusions.

て行ない、その平均値で図示したものである。

Fig. 7 で、介在物量と粒径、 d の関係は、 $d=200\sim 300\mu$ あるいは $400\sim 500\mu$ 付近のピークを除けばヒート A の場合を除きほぼ指数関数で近似しうるが、介在物がゼロとなる粒径、 d^* はヒートによりかなり異なり、

ヒート A, C, D では $d^*>500\mu$, ヒート B, E ではそれぞれ $300\sim 400\mu$, $200\sim 300\mu$ となつている。ヒート A における粒径分布は Fig. 8 a で、溶損の極めて少ない A, G, 質ノズルを用いたヒート B のそれと比較すれば、F, S, 質ノズルの溶損⁴⁾に起因するタイプ I-介在物

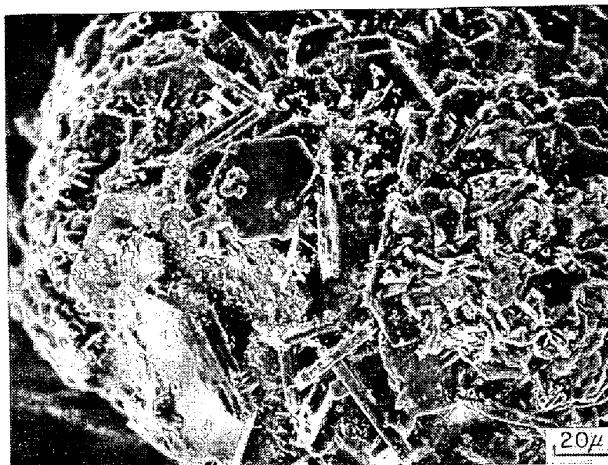


Photo. 6. Microstructures of surfaces of inclusions extracted from as-cast steel slab.

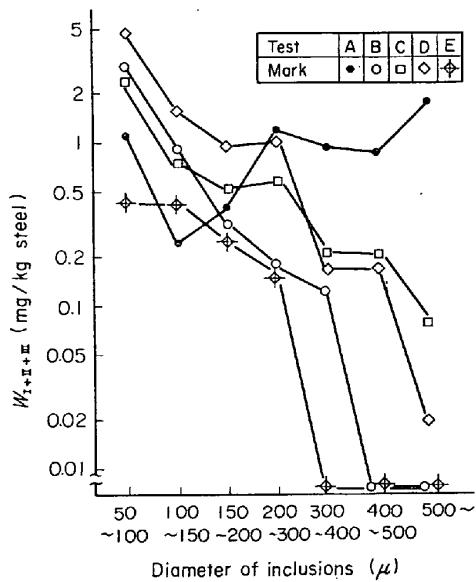


Fig. 7. Effects of casting conditions on the size distribution of extracted inclusions (all three types).

の存在、さらにはタイプⅡ、Ⅲ-介在物への変質により、特異なものとなつてると判断される。

A.G. 質箱型ノズル使用のヒートC, DおよびEを比較する。ヒートC, Dはほぼ類似の粒径分布であるが、タイプⅢ介在物はヒートCがやや多い。これは、 Al_{sol} がヒートCで0.033%とDの0.011%よりかなり高いためであろう。一方、 Al_{sol} が0.005%以下のヒートEではどのタイプについても介在物量はヒートC, Dよりも著しく少なく、溶鋼中のAl, Si濃度の影響が著しいと考えられ、その理由については後で考察する。

なお、タンディッシュ内溶鋼中の鉄込中期における酸素濃度はヒートA, B, Cについて $30 \pm 5 \text{ ppm}$, Dの場合 $40 \pm 5 \text{ ppm}$, ヒートEで $60 \pm 10 \text{ ppm}$ であり、大

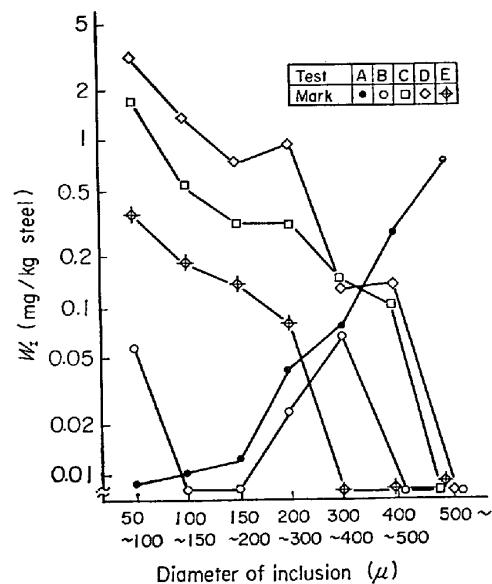


Fig. 8 a. Effects of casting conditions on the size distribution of extracted inclusions of type I.

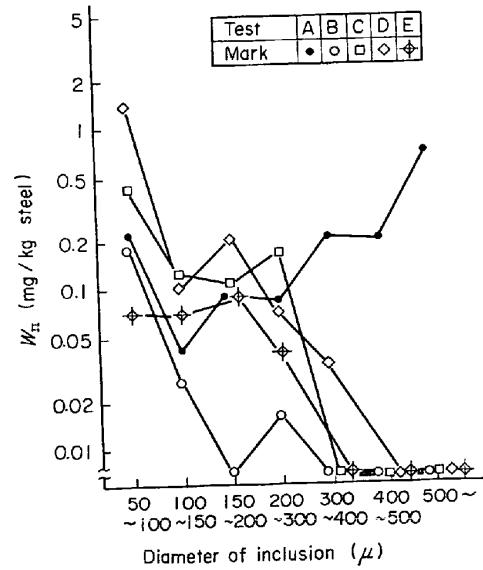


Fig. 8 b. Effects of casting conditions on the size distribution of extracted inclusions of type II.

型介在物の量と正の相関はない。

Fig. 9は、タイプⅢ介在物およびアルミナクラスターを伴う $200 \mu\phi$ 以上の介在物の全介在物数に対する割合 F_{AC} を鉄片の光学顕微鏡観察により示したもので、同図より F_{AC} は $\% \text{Al}_{\text{sol}}$ により支配され、 $\% \text{Al}_{\text{sol}} \leq 0.005$ で0に漸近し、このAl濃度は介在物中の $\% \text{Al}_2\text{O}_3$ が急激に変化する点、すなわち、脱酸反応がAl主体からSi主体へ移行する濃度に対応すると考えられる。この点についてはステンレス鋼において矢野ら⁹⁾もほぼ同一の

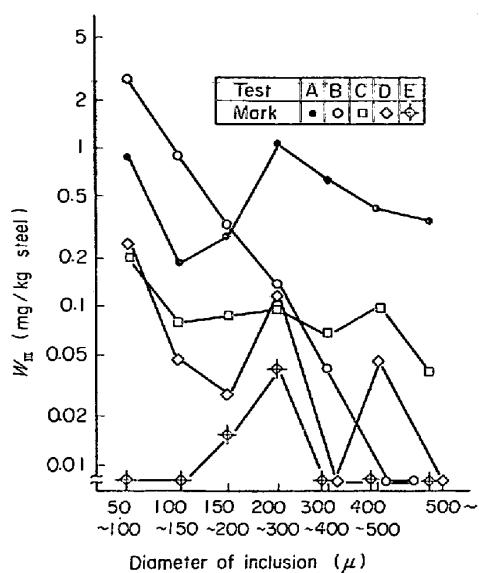


Fig. 8c. Effects of casting conditions on the size distribution of extracted inclusions of type III.

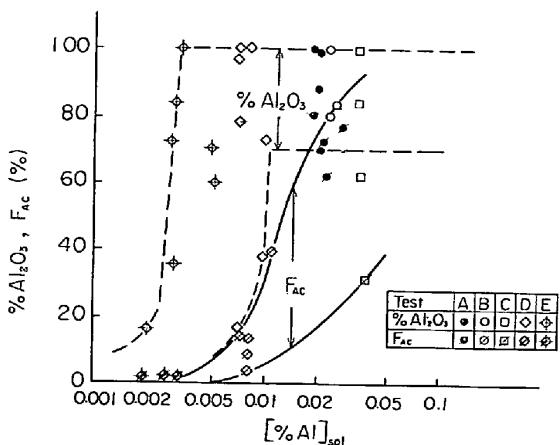


Fig. 9. Effects of acid soluble aluminium content in steel on Al_2O_3 content of inclusions and frequency of large angular inclusions accompanied by alumina cluster, F_{AC} .

Al 濃度を示している。

4. 考察

4.1 連鉄片、熱延鋼板中の大型介在物の形態間の対応関係

鋼中非金属介在物の熱間圧延時の変形はその組成に依存する¹⁰⁾。白岩ら¹¹⁾は介在物の物理的性質と変形、相変態の関連について調べ、 $\text{SiO}_2\text{-CaO}\text{-Al}_2\text{O}_3$ 系の介在物については Anorsite 領域のものの軟化点は $800\sim840^\circ\text{C}$ と通常の熱間圧延温度より低く、圧延時の変形が容易であるが、 SiO_2 5% の gehlenite の軟化温度は 1000°C 以上であり介在物は延びにくいくことを示している。本研

究において大型介在物中に認められた $\text{CaO}\cdot2\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{CaO}\cdot6\text{Al}_2\text{O}_3$ の微少硬度は $\text{CaO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ の 420 kg/mm^2 に対し、それぞれ 500 , 1000 kg/mm^2 ¹¹⁾ と著しく大きく、これらの化合物の融点も $\text{CaO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ の 1605°C ⁶⁾ に比較して $\text{CaO}\cdot2\text{Al}_2\text{O}_3$ の 1750°C ⁶⁾, $\text{CaO}\cdot6\text{Al}_2\text{O}_3$ の 1850°C と上昇する⁶⁾。したがつて、連鉄片内の介在物の熱間圧延時の挙動については、マトリックスの Anorsite 領域のものが伸長し、 $\text{CaO}\cdot2\text{Al}_2\text{O}_3$ および $\text{CaO}\cdot6\text{Al}_2\text{O}_3$ 、さらには Al_2O_3 がほとんど変形しないことが予測され、熱延鋼板中の介在物形態（例えば Photo. 2）からその妥当性がうかがわれる。

なお、Fig. 2 においてヒート E の介在物の b_L/b_T が他のヒートと同様に 5 程度の値を示すにとどまつたのは介在物形状の測定に際し、 L , T 方向につき、 $b_L \geq 50\mu$, $b_T \geq 20\mu$ の介在物の長さの相加平均を求めたため、小型介在物の多いヒート E では b_T の平均値が大きく評価されたためであろう。

つぎに、外層部に析出物を有する介在物の変形挙動から、析出物の最外周部の包らく面が球であるとしてその直径を R とすると、 R の大きい介在物ほど熱延鋼板中の介在物の存在範囲が広くなると考えられる。

まず、 $150\mu\phi$ の球形介在物と酸素量の等しいアルミニナクラスターの直径、 R_A を求める。連鉄片のアルミニナクラスターの直径および粒子間距離の測定結果、それぞれ 4μ , 5μ を用い、球形介在物が Al_2O_3 80, CaO 20% とすると、 $R_A=350\mu$ が得られ、アルミニナクラスターの存在域は体積換算で球形介在物のそれの 12 倍と著しく広がることがわかる。つぎに、Photo. 6 のように介在物外層部に析出物が認められ凹凸が著しい場合について R を評価する。すなわち、外表面より $0.2R$ の部分の体積のうち 20~40% を地鉄が占める介在物と球形介在物の体積が等しいと仮定すると、前者の R は後者の 103~107% となる。この程度の R の増加であつても、超音波探傷欠陥となる介在物径の臨界値近傍では無視しえないものと考えられる。

したがつて、連鉄片の介在物形態、タイプ I, II, III はこの順に熱延鋼板中の介在物の大きさおよび形態に悪影響をおよぼすと判断される。これは、超音波探傷欠陥の発生頻度は ① b_T , ② 介在物の密集度および ③ b_L に依存し、①, ② は超音波の介在物による反射エコーの強度を決め、③ は一定の長さだとえば 1000μ 以上では高速超音波探傷確度に対する影響は少ないと推測されるためである。したがつて、連鉄片内の球形介在物の直径が同一であつてもタイプ I, II, III の順に超音波探傷欠陥の発生率が増加すると予測されるが、これは

Fig. 3 および 4 に示した本研究結果により妥当であると考えられる。しかし、Fig. 7 で FS 質ノズル使用のヒート A は AG 質ノズルを用いたヒート B～E に比べて大型介在物が著しく多いにもかかわらず、UST 欠陥発生率はさほど低下していない。この理由は、UST 欠陥発生率は必ずしも管内探傷部分の大型介在物個数と比例的な関係を持たないことによると推測される。

なお、電縫钢管用素材を造塊工程をへて製造する場合

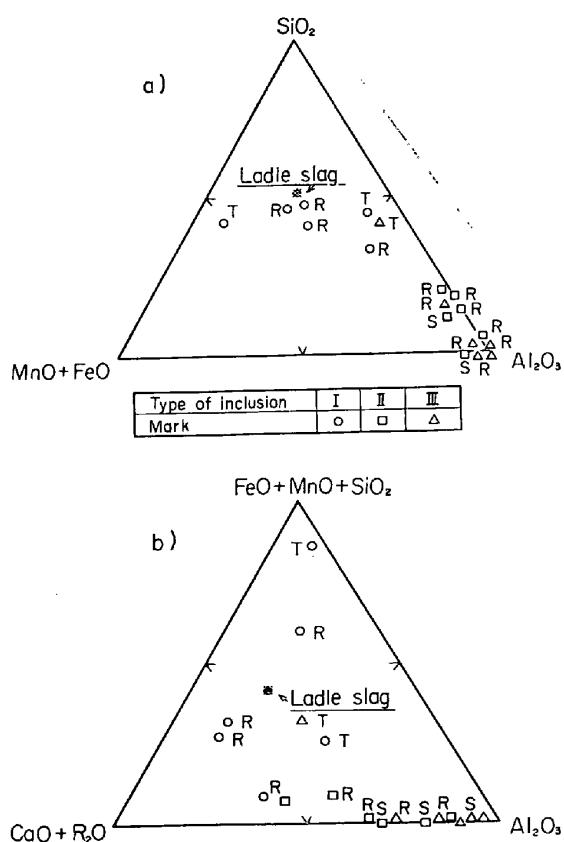


Fig. 10. Chemical compositions of inclusions in low carbon Al-killed steel.

R and T denotes inclusions in liquid steel during RH treatment and in tundish respectively, S denotes inclusions in steel slabs.

Table 2. Estimated values for the activity of oxide components in non metallic inclusions equilibrated with liquid steel.

Reaction	Composition of steel	Activity of components	Remarks
FeO-Al	%Al=0.002	$a_{FeO}=0.004$	Test A-E
MnO-Al	%Al=0.002	$a_{MnO}=0.02$	Test A-E
SiO ₂ -Al	%Al=0.004, %Si=0.15 %Al=0.01, %Si=0.15 %Al=0.03, %Si=0.07	$a_{SiO_2}=0.01$ $a_{SiO_2}=0.004$ $a_{SiO_2}=0.0005$	Test E Test D Test A-C
CaO-Al	%Al=0.03	$a_{CaO}=1.0 \cdot 10^6 [\%Ca]$	Test A

には Al 主体の脱酸とし大型シリケート系介在物の発生を防ぐことが推奨されている¹²⁾。本研究ではこれとは逆に Si 主体の脱酸を行なつたヒート E で好結果が得られた。この理由は 4・2 で詳細に述べるが鋼の凝固条件が造塊工程と連鉄工程では異なるため結果的に連鉄工程では Si 主体の脱酸を行なつた場合の方が大型介在物の発生が少ないためであると考えられる。また造管後の偏平試験結果などの機械的性質は全ヒートを通してとくに差は認められなかつたことも前述の推定を裏付けるものと考えられる。

4・2 RH-連続铸造工程における介在物組成の変化

RH 処理末期およびタンディッシュ内溶鋼より採取したポンプ試料と鉄片内の大型介在物の組成を Fig. 10 に示す。RH 処理末期では、取鍋スラグ組成に近い介在物が認められ、タンディッシュ、鉄片と工程が進むにつれて介在物組成は、Fig. 10 a) の場合 $3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$, Fig. 10 b) の場合, $2CaO \cdot Al_2O_3 \cdot SiO_2$, $CaO \cdot 2Al_2O_3$, $CaO \cdot 6Al_2O_3$ をへて Al_2O_3 コーナーへ向かつて変化することがわかる。これらの組成変化はいずれも Fig. 10 に対応する系の状態図の低融点域を経由するものである。

この組成変化は容易に還元されやすい成分を含む大型介在物と Al の反応による¹³⁾と推定され、以下に簡単な検討を行なつた。

FeO, MnO, SiO₂ および CaO が Al により還元される反応を想定し、反応生成物 Al_2O_3 の活量を 1、反応温度を 1550°C として試験ヒート A～E の溶鋼組成に対応する平衡時の被還元成分の活量を評価し Table 2 に示す。なお、計算には学振推奨値¹⁴⁾および小林らの Ca 脱酸の平衡値¹⁵⁾を用いた。該当する系の活量と濃度の関係¹⁶⁾から、FeO, MnO は Al の存在下でほぼ完全に還元され、CaO-Al 反応はほとんど起こらないと判断され、詳細を略すが実験的にこれを確認した。

SiO₂-Al 反応は溶鋼組成によって平衡値、 a_{SiO_2} が変化し、REIN ら¹⁷⁾の活量測定結果 (Fig. 11) を考慮する

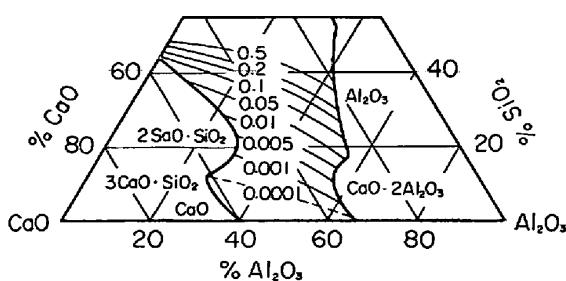


Fig. 11. Activity of SiO_2 in $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3\text{-CaO}$ ternary system, 1600°C [17].

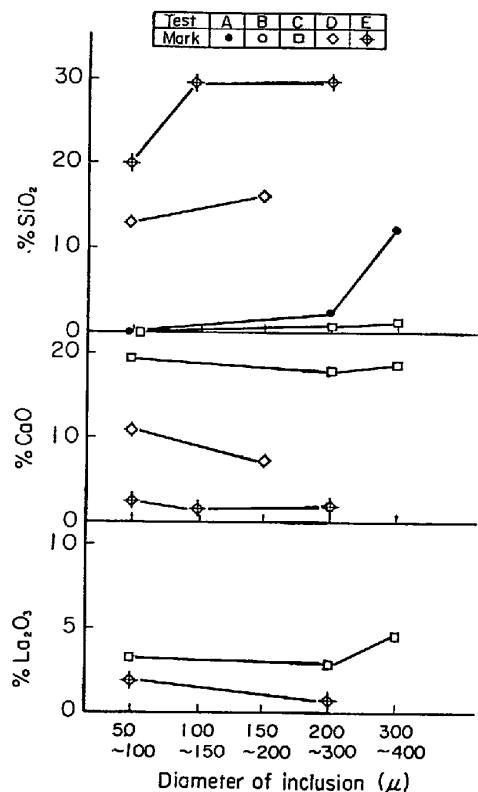


Fig. 12. Average composition of extracted non metallic inclusions determined by glass-bead fluorescence X-ray method.

とヒート A～G では、 SiO_2 はほぼ完全に還元される一方、 $\text{Al} \leq 0.002\%$ 、 $\text{Si} 0.15\%$ でのみ還元反応が起らないと判断される。

WAUDBY ら¹⁸⁾は Fe-Si-O 系脱酸生成物の Al による還元反応について研究し、液状シリケートは 30 sec 以内で平衡組成に達するが、固体状シリカとの反応は遅いことを示し、反応速度は介在物表層部に生成した層状 Al_2O_3 を通しての Al^{3+} 、 Si^{4+} の拡散により支配されると述べている。

Fig. 12 は試験ヒート別に鉄片のスライム抽出残査の組成を蛍光X線分析¹⁹⁾により求めた結果である。Fig. 12 中で介在物中の % SiO_2 は鋼中 Al 濃度と密接な関連が

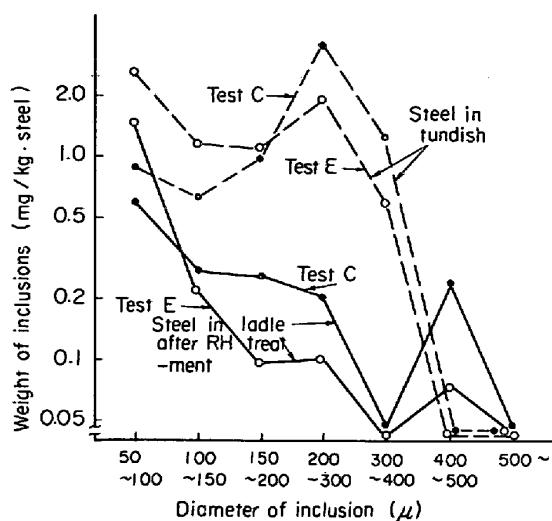


Fig. 13. Effect of aluminium content of steel on size distribution pattern of non metallic inclusions in liquid steel.

あり、 Al の低いヒート E が Al の高いヒート A、C より高値を示す。また介在物中の % SiO_2 は直径の増加に伴いやや增加する傾向が見られ、WAUDBYらの拡散律速モデルと符号する。なお、ヒート A で 400 μ 径の介在物の % SiO_2 が高値を示すのはヒート A で用いた F.S. 質浸漬ノズルの溶損に起因すると推定され、ヒート A の鉄片内介在物粒径分布 (Fig. 7) と符号し興味深い。

さらに、これらの Al と介在物間の反応は Photo. 4 中の球形介在物の外層部に接して存在する Al_2O_3 粒子の存在からも妥当な仮説と考えられる。

4.3 外来性介在物の混入

大型介在物中に含まれる CaO 、 Na_2O は 4.2 で述べたように取鍋スラグ、連鉄フラックスなどに起因すると考えられる。この点を検討するため、試験ヒート C および E に該当するヒートを各 2ch 出鋼した。

Fig. 13 は、これらのヒートの RH 处理末期および鉄込中期のタンディッシュ内溶鋼より採取した試料中の介在物の粒径分布である。RH 处理末期、タンディッシュ内溶鋼中にはそれぞれ 500 μ 、300 μ を中心に指数関数分布からはずれる介在物が認められ、さらにこの間に介在物量の著しい増加があり、 Al 濃度の高いヒート C がヒート E に比べて 150 μ 以上の介在物量が多いことがわかる。鉄片内の介在物の粒径分布は Fig. 7 と同様であり略すが、タンディッシュ-鉄片間では 150～400 μ の介在物が 50～95% 浮上し溶鋼より分離される一方、500 μ 以上の介在物がヒート C で 0.1 mg/kg·steel 程度混入することが確認されている。これは、 Al 濃度の高い溶鋼を AG 質箱型ノズルにより铸造する

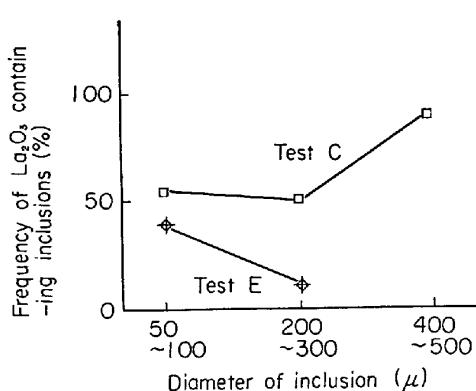


Fig. 14. Effect of casting conditions on entrapment of tundish flux into molten steel.

際に観察されるノズル内面への付着物⁸⁾がはく離したためであろう。

Fig. 12 はタンディッシュ用フラックス中に La_2O_3 をトレーサーとして 5~7% 混入し、鋳造した鋳片中の介在物分析結果、Fig. 14 は La_2O_3 を 1% 以上含む介在物の発生頻度を 50 個以上の抽出介在物の EPMA 分析により求めた結果である。 La_2O_3 分析値よりタンディッシュフラックスに起因する鋳片内介在物の比率を評価するとヒート C の場合 50~300, 400~500 $\mu\phi$ の介在物に対しそれぞれ 50, 80% 程度、ヒート E では 50~100, 200~300 $\mu\phi$ の介在物でそれぞれ約 30, 5% となる。個々の介在物の La_2O_3 濃度は混入物と Al との反応よりもほとんど変化せず、 La_2O_3 を含まない他の介在物との合体によつて減少するため、前記の評価は最小値を示すに過ぎないが、Fig. 14 とほぼ一致する。介在物中の CaO については La_2O_3 と同等に考えられ、これを前提に、鋳片内介在物の CaO バランスより取鍋内スラグに起因する介在物の比率の最小値を見積ると、ヒート C では 50~300, 400~500 $\mu\phi$ の介在物につきそれぞれ 15, 2% ヒート E では 50~300 $\mu\phi$ の介在物に対し 0% となる（前記タンディッシュフラックス起因介在物の比率および取鍋スラブ、フラックス中の CaO 分析値を用いて算出）。外来性介在物の鋳片内介在物に対する比率が Al 濃度の増加にともない増加することは Fig. 14 に示したが、これは Fig. 12 の CaO 分析値と各ヒートの % Al の関連からも妥当であろう。この現象は脱酸生成物の組成にしたがつてその物理的性質が Al 濃度に対応して変化することにより、スラグ-溶鋼界面におけるスラグの混入条件、混入物の浮上分離および凝固シェルへの捕捉の条件などが変化するためと推察されるが、生産工程における溶鋼流動を考慮するとその本質的な原因についてはさらに詳細な検討が必要であろう。

なお、タンディッシュフラックスの混入比率については垣生ら²⁰⁾の研究結果とほぼ一致し、タンディッシュの形状の改善²⁰⁾によりフラックスの混入比率は著しく低減しうることが判明している。また連鉄工程における外来性介在物の混入については熊井ら⁴⁾、植田ら²¹⁾によつてスラグ、フラックスおよび耐火物の混入が観察されている。

4.4 外来性大型介在物の生成機構

前節の考察により外来性大型介在物の生成機構を推察するとつぎのようになる。

- 1) RH 脱ガス処理中、タンディッシュ通過中にスラグが混入する。また浸漬ノズルからは F.S. 質ノズルの場合溶損物が、AG 質ノズルではノズル付着物がはく離して混入する。
 - 2) 混入介在物はタイプ I が主体であり、 Al と反応してタイプ II となる。
 - 3) 液状介在物は他の介在物を合体、均一化し介在物中の CaO 濃度は低下する。
 - 4) 2), 3) の過程は溶鋼温度、介在物の融点により進行の程度が決まる。これは、2), 3) の過程が酸化物中の金属イオン、 Al^{3+} , Si^{4+} などの拡散律速のためである。
 - 5) Al と介在物の反応の進行にしたがい、反応は停滞する。これは介在物の外表面に融点の高い反応生成物が生ずるためである。
 - 6) このため、連鉄工程の進行にしたがつて 2), 3) の過程は進行しがたくなり、均一化の完了しない Al_2O_3 粒子をともなう介在物が生じ、この間で合体が起るとタイプ III の介在物となる。
- したがつて、外来性介在物の混入時期および鋼中の Al Si 濃度に対応して種々の形態の介在物が出現し、% Al の高い場合には混入時期の早いものから、タイプ III, II, I となり、鋳片の上面側集積帶に捕捉されるものと考えられる。
- たとえば、 $\text{CaO}\cdot 6\text{Al}_2\text{O}_3$ (Photo. 6 a) は Anorthite, Gehlenite 間の低融点域に対応する組成の混入スラグ、スラックスが Al とただちに反応した際の反応生成物が介在物本体と均一化しなかつた例であり、 $\text{CaO}\cdot 2\text{Al}_2\text{O}_3$ (Photo. 5 c) は多少の Al_2O_3 を均一化し Gehlenite 域に移行後に Al と反応した反応生成物の例と考えられる (Fig. 6 参照)。この場合、 $\text{CaO}\cdot 2\text{Al}_2\text{O}_3$ の生成は $\text{CaO}\cdot 6\text{Al}_2\text{O}_3$ よりも % Al の低いヒートで起ることになるが、Fig. 5 で $\text{CaO}\cdot 2\text{Al}_2\text{O}_3$ および Gehlenite 域の介在物は % $\text{Al}_{\text{sol}}=0.011$ のヒート D にのみ認められ、% $\text{Al}_{\text{sol}}\geq 0.019$ のヒート A~C では大半が $\text{CaO}\cdot 6\text{Al}_2\text{O}_3$ 域

の組成の介在物であることは前記の見解を支持するものであろう。

4・5 外来性大型介在物の低減方法

本研究結果より RH、連鉄工程で鉄片を製造する際に大型外来性介在物の発生を防ぐための要点を以下に示す。

1) Al 濃度の低減：外来性介在物の混入および混入物の Al との反応による大型化を避けるため、出鋼時のみ Al を添加し十分な RH 処理により介在物を分離し、RH 処理末期の溶鋼組成を $\%Al_{sol} \leq 0.005$ 、 $\%Si$ 0.15 に調整する。

2) 浸漬ノズル：溶損物による大型介在物の発生を防ぐため AG 質が、クレーター内での介在物到達域を浅くするため箱型²²⁾、ボトル型¹⁾²⁾が適切である。

その他、タンディッシュにおける混入物が外来性介在物の大半を占めるため、タンディッシュの形状、構造の改善²⁰⁾、注入流酸化の低減²²⁾が大型介在物の発生を防ぐ上で効果的であることが確認されている。

5. 結 言

電縫鋼管用連鉄素材中の大型外来性介在物の低減を目的とする工程試験を行ないつぎの結論をえた。

1) 大型外来性介在物の低減には、出鋼時のみの Al 添加後、RH 処理を十分行ない、 $\%Al_{sol} \leq 0.005$ 、 $\%Si$ 0.15 に調整した溶鋼を AG 質箱型ノズルを用いて鉄造するのが効果的である。

2) 1) の方法により起音波探傷後の钢管合格率は 99.8% 以上となり高品質の電縫钢管の製造が可能となつた。

3) $\%Al_{sol} \geq 0.010$ では直径 200~300 μ 以上の大型外来性介在物が発生し電縫钢管溶接部で密集した巨大な超音波探傷欠陥を多発するため钢管の探傷合格率は著しく低下した。

4) 混入した介在物の組成、形態の変化について考察し 1~3) の結果は混入した介在物の組成変化、大型化が $\%Al_{sol}$ の低い場合に実質的に抑制され、混入量も少

ないことの 2 点により説明した。

5) 鉄片、熱延鋼板内の介在物形態間の対応関係を明示した。

本研究の発表を許可された当社専務取締役技術研究所長三木本貢治博士、実験の遂行、討論にご援助いただいた垣生泰弘主任研究員、丸山英雄研究員スライム抽出とその分析に協力された吉田良雄主任研究員および関係各位ならびに日製産業(株)岡本孝夫氏に深く感謝する。

文 献

- 1) 堀生ら：鉄と鋼，60(1974)，p. 962
- 2) 堀生ら：鉄と鋼，60(1974)，A. 99
- 3) F. W. IRWIN et al. : J. Metals, 22(1970), p. 30
- 4) 熊井ら：鉄と鋼，60(1974)，p. 926
- 5) 広本ら：鉄と鋼，57(1971)，S. 453
- 6) A. L. GENTILE, et al. : J. Amer. Ceram. Soc., 46(1963), p. 44
- 7) R. WOLDETH : X-ray Energy Spectrometry, Kevex Corp. Burlingame, Cal, 1973
- 8) 中戸ら：鉄と鋼，60(1974)，S. 430
- 9) 矢野ら：学振 19 委—9690. 昭和 48 年 11 月
- 10) R. KIESSLING : Non-metallic inclusions in steel, Part III, The Iron and Steel Institute, London SW 1, 1968
- 11) 白岩ら：住友金属，25(1973)，p. 266
- 12) 大滝ら：日本钢管技報，(1966)，No. 38, p. 29
- 13) L. LUYCKX, et al. : J. Metals, 26(1974), 6, p. 35
- 14) 学振 19 委：製鋼反応の推奨平衡値，日刊工業新聞社，1968
- 15) S. KOBAYASHI, et al. : Trans. ISIJ, 11(1971), p. 260
- 16) J. F. ELLIOT, et al. : Thermochemistry for Steel-making, Addison Wesley, New York, 1963
- 17) R. H. REIN, et al. : Trans. Met. Soc., AIME, 233(1965), p. 415
- 18) P. E. WAUDBY, et al. : JISI, 211(1973), p. 486
- 19) 安倍：私信
- 20) 堀生ら：第 59 回製鋼部会，昭和 49 年 11 月
- 21) 植田ら：鉄と鋼，60(1974)，p. 943
- 22) 堀生：私信